



イギリスはロンドンの街中、かの有名なベイカー街の裏手にペイカー街という路地があることはあまり知られていない。

しかし、あるのである。読者はこれを疑ってはいけない。ゆめゆめ地図で探してみようなどとろくでもない考えを起こしてはいけない。

私があると言ったらあるのである。あるのである。あるんだ。ホントである。ウソじゃないもん。あるの！あるんだってばよ！疑うのかよ、上等だ、殴るぞこの野郎！

失礼しました。ちょっとアタマに血が上りました。深呼吸、落ち着きました。

そいで、私、ワソトンはその通りで開業している医者である。

同居人はかの有名な私立探偵シャーロック・ホルムズ氏である。

私の名を含めて、どこかで聞いたような聞かないような名前だなあとと思った方は、そのような邪推は捨て去るよう忠告します。ましてやこの私が無免許医じゃなかろうかとかそういう疑惑は考えないようにしていただくと助かります。

そうして、なんか私たちの下宿の反対側に似たような名前の同業者がいるとは聞いたことがないでもないが、決して私たちは、似たような名前と場所で、うっかり間違えた依頼人が引っかかりかなあと期待しているわけでは決してない。

この同居人のホルムズの事件の無いときの私生活は、あまり褒められたものではないだろう。深夜、引けもしないヴァイオリンでギーコギーコと騒音を立てて、腹を立てた私から殴られたり、できもしないボクシングのまねごとをして私から殴られたり、たまには阿片窟でラリって私から殴られたりして毎日を暮らしている。

結局考えてみれば、彼は私から殴られっぱなしの毎日なのであるが、それでも私が彼をこの下宿からほっぽり出さないのはひとえに彼の探偵としての才能に感服して、その芸術にも等しい推理能力に尊敬の念を感じていたからだということではさらさら無い。

私が彼を逃がさないのは、彼が私からチビチビと小銭を借りていっては競馬やらなんやらの賭博や阿片窟でそれらの金を浪費し、折半する約束の家賃も光熱費も払った試しが無く、結果的には私から多額の借金をしてそれをビター文返さないどころか、なんだかんだとウソをついては私から小銭を巻き上げ、そうこうしている間にもその借金は雪だるま式に増えていき、あろうことか私の留守中に勝手に私の隠している現金をちょろまかすわ、私の時計を質屋に持ってくわ、そんで、平気でヘラヘラ笑って、こんだけ借金してからにバックレようたってそうはイカンぞ、一度くらいまともに稼いでみるというのだ、この役立たずの社会生活不適應者寄生虫ウジ虫野郎人間の屑甲斐性なしバカ間抜け阿呆あげくに私が無免許医だとばらすようなことをちらすかすとはいいい度胸だな貴様しまいにゃ腹カッサバいて内蔵売り飛ばすぞどうせオレあもう何人も失敗してコロシてるんだぞこの際何人コロスも同じこっちゃ！

失礼しました。

深呼吸、落ち着きました。

さて、ホルムズはこれまで幾多の事件に関わってきたはそこに興味深い足跡を残してきたところである。

そして私はその相棒として、彼の活躍を記録してきたのであるが、それは彼が私の無免許医だという弱みをちらつかせては私に借金をせびるというお返しに、こちらだって彼の失敗の数々を克明に記録し、いざとなったら彼の言動を暴き、事によっては刑事事件として告発するぞと脅して、彼が私からの借金を踏み倒してトズラするのを防ぐためというような目的では決していない。

ただ、こうして彼の行動のうちでも比較的当たり障りない部分を公表することで、彼が自らこりゃやばいと感じ、いくらかでも私に借金を返さんとえらいことになるなあ、と思うかどうかは彼の自由である。

というような訳で、私は彼の扱った事件の記録を品定めしてみたのだが、調べれば調べるほど、よくもまあこんなに失敗してきて平気でいられるものだと思えるような事件ばかりで、まともに解決できた事件を探すのは大変であった。

それはホルムズという男の転落の人生を綴る奈落の底への旅であり、普通の人間ならば自責の念にかられて首でもくくって死ぬのが当然のような、惨憺たる口に出すのもおぞましい鬼畜の所行の連続であった。

その中から、私はかろうじて一つの事件を探し当てた。まあ、一応犯人は捕まったわけだし、これをもってホルムズの推理のおかげなのかと言えはちょっと首を捻らざるを得ないところもあるが、その解決法においては確かにホルムズ独特なものがあり、また、あからさまに我々二人の手が後ろに回る恐れも少なからうという事件である。

今回はその事件について語ろう。

その日の午後、私はまたも阿片窟から朝帰りして床の上に伸びているホルムズを尻目にビクビクしながら下宿の窓から外を眺めていた。

実を言うと、午前中サンダーソン婦人の往診に出かけていたのだが、生かさず殺さずをモットーとする私は、例によって婦人に毒にも薬にもならない生理食塩水を注射したところ、どうしたことか婦人は四肢をわなわなと震わし出したのである。

「先生、なんかこれ、大丈夫でしょうか？」

しまった、どうやらなんか別の薬を注射してしまったようだ。まあ、毎度のことではあるのだが。

心配して見ている家族の手前、私は落ち着き払って、

「いや、なに、薬の効果が出始めたようすな」

と、答えたものの、内心は冷や汗ものだった。ええい、もうどうともなれ、と、やけくそでブスと中身のよくわからん薬を注射してみたら、患者はとうとう白目をむいて口から泡を吹き出し、死んでしまった。

私はばれないようにコッソリそのまぶたを閉じて、口の泡を拭くと、

「うん、患者さんはよく眠ってますな、ご家族の方はソツとして患者さんの目が覚めないようにしてやって下さい。少なくとも、明日の昼まではこの部屋に入らないように」

そうして挨拶も早々に、スタコラ下宿に逃げ帰ってきたところだったのである。

窓の外はロンドン名物の霧が立ちこめていた。私は、サンダーソン婦人の家族が婦人の変死に気がついて文句を言い気やしないかとか、あるいはもっとヤバイことになっていて、直接警察関係の方が来るのじゃないかしらと、ヒヤヒヤしながら窓の外を窺っていたのである。

果たして、霧の中から誰か人影らしきものが現れて、霧の中、おぼろげにしか見えないのだが、どうやら下宿の真下の歩道でキョロキョロとあたりを確かめているようだ。

こりやまずいなと思った私は、窓辺に置かれた植木鉢を手にとると、狙いを済ましてエイヤッとその人影めがけて投げつけてみた。キャッと声がして人影がよろめいたので当たったようではあったが、フラフラと動いていたので致命傷にはいたらなかったようだ。

そこで私は床で伸びているホルムズを抱えあげた。不摂生な生活が祟った彼の体は軽かった。

「ウーン、アレ？ワソトン？何してんの？」

寝ぼけている彼の質問を無視すると私は彼の体を歩道の人影に投げつけた。今度は、キャーツというホルムズの悲鳴と、グエッという叫び声があがり、人影が地面に倒れて動かなくなった。折り重なって倒れたホルムズはかろうじて意識があるようだ。

「ホルムズ、ホルムズ？」

私は呼びかけた。

「ウム、ワソトン君、今確か君に投げ出されたような気が…」

「幻覚だよ、ホルムズ。アヘンは止めるべきだね。君は勝手に窓から飛び出したんだ。それよかホルムズ、その人、サンダーソン婦人の家族か、警察関係の人かい？」

「ちょっと待ってくれ…いや、違うようだね。なんかメモを握ってる。ああ、シャーロックホームズって書いてある」

「しめた！ホルムズ、部屋に運ぶんだ」

数分後には準備ができた。下宿の居間に運び上げた男は気絶したままソファーに腰掛けさせている。上等なチヨッキに高そうな懐中時計、かなり裕福な服装である。一応男のポケットの中身はあらためておいた。名刺があった。フォーム、ジョージ・ヘルペス、退役軍人会の副会長か…。ホルムズは気取って暖炉のそばの安楽椅子に腰掛けていて、パイプ煙草を燻らせている。こうしていると一見してアホだとは思えないからフシギなものだ。

「ホルムズ、準備はいいかい？起こすよ」

「注射は止めてくれよ、ワトソン君。もう夜の夜中に森に死体を埋めに行くのはこりごりだ。そもそも、もう埋める場所がなくなってきたし、腐乱した臭気が…」

「黙ってる！この穀潰し！そのうち貴様にも一本打ってやるぞ！」

するとホルムズは怯えて黙ったが、しかしさすがの私も一日に二人もコロスのは考えものだと思ったので、ソファアの人物に猛烈な往復ビンタを打ってみた。

それでも起きない。仕方がないのでいつもホルムズにするように、力の限りの鉄拳を喰らわせてやったら、ゴキリと嫌な音がして、どうやら歯が折れたんかもしんない。鼻から血しぶきが飛んだ。

「う、あ痛っ、イタタタタ」

どうやらようやく意識を取り戻しつつあるようだ。私は慌ててホルムズの背後に控えた。

「お目覚めのようですね」

ホルムズは目を閉じたまま、顔の前で両手の指を合わせると、落ち着き払ってそう語りかけた

。



「うー、なんか痛い。鼻血出てる」

「それはバビロニア猩紅熱の傾向があるですね」

と、私。

「歯も折れたような気がする。なんか上から落ちてきて...」

「そりゃ妄想ですね。スベロフスコ症候群が併発している可能性もあります」

私は口から出まかせを言いながら、こりゃついでに治療費もふんだくれるかもしれんと考えた。

「ここはどこです？」

ようやく頭がはっきりしてきたらしい相手は、怪訝な表情でそう尋ねた。

さて、ここからがホルムズの出番だ。

「ご安心を、ジョージ・ヘルペスさん。そして退役軍人会副会長殿、ここがあなたの探していたシャーロック・ホルムズ探偵事務所です」

「すごい！ホルムズ！どうしてそんなことがわかるんだい？」

私はめいっぱい驚いて見せた。

「なに、初歩的な推理だよ、ワソトン君。こうして目を閉じていてもそれくらいはわかるのさ」

すると紳士はしげしげとホルムズを見つめて、こう言った。

「私はフレデリック・ロボロフスキーと申します。ジョージ・ヘルペスという名前ではありませんし、ましてや退役軍人会の副会長などではありません。単なる居酒屋のオヤジです」

「え、だって名刺が...」

と、ホルムズが言いかけたので、私はあわてて後ろからホルムズの背中にメスを突き刺した。ホルムズはうぐ、と息を飲んで叫びをこらえた。なんとかしろ、ホルムズ。

「うう、も、もちろんそうですとも、フレデリック・ロボロフスキーさん。ちょっとしたトリックを使わせてもらいました。これで私にはあなたの名前と職業が分かったわけです」

「...。あなた、シャーロック・ホームズさんですよね？」

「いかにも、シャーロック・ホルムズです。」

「...。なんか、微妙に違うように聞こえるんですが」

「いや、そりゃ気のせいですね」

「...」

こりゃちょっとアブナイ。私はホルムズに声をかけた。

「ホルムズ」

「なんだい、ワソトン君」

「この前せっかく事件の依頼に来られた方が、結局依頼をやめて帰ろうとなさったねえ」

「あー、あの、帰りに何故か階段を転がり落ちてお亡くなりになった方だね」

「そうそう、他にもいたねえ」

「あの闇夜に突然襲われて刺し殺された方のことかな」

「依頼されときゃよかったのにねえ」

「ウン、そうだねえ」

ここいらは一見悪質なユスリをしているような気がする方もおありだろうが、そういった憶測は全然筋違いなので、ご安心いただきたい。私とホルムズは純粋に依頼人の身をおもんばかっているだけなのである。

果たして依頼人はドギマギして震えだし、ポケットからハンカチを出すと、額の汗を拭い始めた。かわいそうに、さぞや事件に心を痛めているのだろう。

「どうやらあなた方に頼まざるを得ないようですな」

そう言って、ロボロフスキー氏は大きくため息をついた。私は彼に嗅ぎタバコを勧めたが、彼は手を振ってそれを断ると、ためらいがちに話し出した。

「実はですね、私は先ほど申し上げたように小さな居酒屋を経営しております、ドレフザー広場の先です。まあちょうど便利もいい場所なので、ほどほどにお客も来るのですが、それだけではちょっと経営的にも苦しいので、2階を改造して宿屋もしているわけです。ほんの数室ですがね。普段は行商人たちの利用が多いのですが、たまには一階で飲み過ぎたお客が使うこともあります」

ホルムズは微動だにせず静かに彼の話の聞いているようだった。

「で、昨日の夕方のことでした。あなたの口にされたジョージ・ヘルペス氏が訪れたのは。年の頃は60代前半といったところでしょうか。身なりのこざっぱりした、いかにも退役軍人らしく、背筋もピンと伸びていました。その時ですね、誰かが盗み見たかもしれない彼の名刺をいただいたのは」

ホルムズは微動だにせず静かに彼の話の聞いているようだった。

「彼は店に入ってくるなり、私に夕食と宿泊の事を聞いてきました。正直に申し上げて、私はちょっと当惑したのです。私の店は小奇麗ではありますが、彼のような紳士が泊まるのに相応しいかどうかは少々疑問に思えたからです。彼のような階級の人間が宿を取るのであれば、普通ならもう少し高級なホテルを選ぶのではないのでしょうか」

ホルムズは微動だにせず静かに彼の話の聞いているようだった。

「それに彼の様子も少し変ではありました。取り乱しているとまではいかないのですが、何かこう動揺を自制しているといった印象を受けました。目が泳いでいるようでしたし、指も小刻みに震えておりました。そうして奇妙なことには」

ホルムズは微動だにせず...

この野郎寝てやがる！私は平静を装いながら、ロボロフスキー氏に見えないように、ホルムズの背中にペーパーナイフを突き立てた。

「南無サンタ・マリーアー！」

ホルムズはそう叫ぶと、椅子から飛び上がった。私は彼の肩を両手で掴むと、無理矢理安楽椅子に押しえつけた。先ほどのメスの傷も合わせて、彼の背中からは血がドバドバ流れ落ち始めた。私はそばにあったバケツをそっと足でずらして、ロボロフスキー氏にバレないようにその血を受け止めた。

「な、なんなんですか、この人は？」

ロボロフスキー氏がのけぞった。

「ホルムズが閃いたようですね」

私はあせって取り繕うと、ホルムズに突き立てたナイフをグジグジとえぐった。このノートリン、何とかしやがれ！

「うう、これは実に、あー、実に痛い」

ホルムズは、きつく目を閉じて呻くようにそう言った。

「痛い？痛いと申しますと？」

「うぐぐ、いや、その、痛いというか、キビシイというか、その、血の気が引きますな。いろんな意味で。とにかく要点だけ、話してもらえませんか」

「え？ええ、わかりました。で、その奇妙な点と申し上げたのは、...」

「いや、もうそんなことどうでもいいから、早く言って。なんなのよ、だから。詐欺？恐喝？殺人？」

「え、どうでもいい？なんか私、今非常に不安を感じておりますが、結論から申しますと殺人事件ということかと...」

「ハイ、殺人、わかりました。じゃね」

そう言うとホルムズはバイバイ、と手を振った。ロボロフスキー氏はあっけにとられた顔で、

「そんな、アンタ、ほとんど何にも話してないですよ、わたしゃ。」

「うるさいな、こっちは生きるか死ぬかの瀬戸際なのよ、ホント、もう冗談事でないのよ。ああ、目眩してきた」

ちとやり過ぎたかな。そっとバケツを見てみたら、ホルムズから出血した血は、もうバケツに半分も溜まっていた。さしもの私も、びっくりして、こりゃイカンと思ったから、

「これ、このようにホルムズの顔はすこぶる青ざめております。これは決して貧血などではなく、ことの重大性に緊張しているのですね。まあ、お任せ下さい。彼は既に事件の真相にかなり近づいております。なあホルムズ」

「ああ、蓮の花が見える...」

ヤバイ、白目むいてる。どうしよう？

「あー、今、ホルムズは推理に没頭しております。であるからして、すみませんが、ちょっと後ろ向いていただけませんか」

「後ろを向く？」

「つまりですね、ここで邪魔するとダメなのですね。静謐さが要求されるのです。なにしろ彼の頭脳は今フル回転しているのです。デリケートな問題なんですね。だから見ててもダメ。気が散りますから」

ロボロフスキー氏は訝りながらもしぶしぶ後ろを向いた。そこで私はバケツを抱えながら、安楽椅子ごとホルムズをずるずる引っ張ると、隣の寝室に運んでいった。

さて、どうしたものか。さしおりホルムズを腹ばいにしてベッドに寝かせ、傷口に絆創膏を貼ってみた。すぐ剥がれてしまう。

絆創膏に瞬間接着剤を塗ってみた。おお、今度はうまくいった。

さて、次はどうか。出血が原因なんだろうから血を返しゃいいんじゃないだろうか。そこでバケツの血を点滴袋に流し込んでから、ホルムズの腕に針を突き刺して、その袋をギュッと絞ってみた。それでもホルムズの意識は戻らない。

そういえば小さな頃、動かなくなったカブトムシに砂糖水を注射したら、また動き出したっけ。もうこの際なんでもいいや。

そこでホルムズにも砂糖水を注射してみた。

すると突然ホルムズはグワーッと悲鳴をあげて、ベッドの上でのたうち回り始めた。

なんか凄い。もう推理小説じゃなくてホラーだな、こりゃ。

さて、読者の中には、まさかひょっとしてこれで終わりってんじゃないかなろうかと、疑念あるいは憤怒の情を持ち、本気で私ワソトンをひっぱたいてやろうかと思ったりした方もおられるかもしれないが、そこはご安心いただきたい。いくらなんでもこれで終わるほど私の神経も図太くはない。ホルムズの活躍はまだまだこれからなのである。

さて、さしおりホルムズのことは放っておくことにして、私は居間に戻った。

「今、ホルムズは思索にふけております。細部については私が承りましょう」

「はあ、ちょっと隣室の物音や絶叫などが気にはなりますが、曲げてその点は無視しましょう。」

「お心遣い感謝します」

「で、ええと、奇妙なことには、というところまででしたかな」

「ええ、そうそう」

「はい、で、ジョージ・ヘルペス氏が言うにはですね、店に『不思議の国のアリス』の本があるか、と、こう言うのです」

「店に置いているわけではないですが、多分店に隣接した私の家にはあったような気がしましたので、そのように伝えました」

「はあ」

「それから彼は、赤いハンカチはないだろうかとも尋ねました。これは持っていれば、私の家内でしょうが、私も見たことはないので多分ないだろうと言いました」

「ええ」

「すると彼はしばらく考えている様子でしたが、やにわに自分のポケットから赤いハンカチを取り出すと、私の目の前でヒラヒラとそれを振って見せたのです」

「ほほう」

「妙でしょう、自分で持っていたのです。私はヘルペス氏の左様な行動にちょっと首をかしげましたが、商売は商売です。彼に夕食を出して、2階で一泊するという取り決めに同意いたしました」

「ナルホドですね」



「夕食にはインゲン豆のスープに、ツグミのパイ。それに伊勢エビの活け作りをお出ししました」

「何です、その伊勢エビのナントカというのは？」

「ジャパニーズフードですな。ヘルシーです。伊勢エビが踊ります」

「おお、ジャパニーズ、カブキ、オタク、トヨタ、スモウレスラーですね」

「ええ、ヘルペス氏は完食いたしましたよ。それから2階に上がったのが、午後10時をまわっておりました」

「1階にはまだ客が4人いまして、徹夜でポーカーをしていました」

「異変に気がついたのは家のウェイトレスです。次の日の朝、つまり今日ですな。ヘルペス氏が朝食に降りてこないのです。彼女が部屋をノックしたのですが、部屋には内側から鍵がかけられていて、応答もなかったのです。そこで私が氏の部屋を訪れまして、1階でポーカーをしていた客も同行しましたのです」

「ふむ」

「で、仕方がないので、5人で氏の部屋のドアを蹴破りました。すると氏は緑のカーペットの上に仰向けに倒れて絶命していた、というわけなのです。その背中にはトトカブロ族の長い槍が突き刺さっておりました。それはその部屋の装飾品として壁に飾ってあったものです」

「警察にはお届けになっていないのですか」

「ええ、本当なら今朝、警察に届けるべきだろうとは思ったのですが、どういうものか4人の客が慌てまして、それを渋ったのです。それもちょっと不審に思えます。ひょっとしたら4人の客の中に犯人がいるのでしょうか？いずれにせよ、そう放っているわけにもいきませんし、どうしてよいかわからなくなりました。そういうわけでこうしてかの高名なホームズ氏にお頼みに来たのですが」

「それは極めて賢明な判断でしたね、ロボロフスキーさん。わかりました。今のお話は私からホルムズに伝えておきます。追って店の方にお邪魔しますから、あなたは先に帰って、4人の客を引き留めておいて下さい。そうして現場には手を触れないように」

「わかりました、そうしましょう。ところで、今更もう一度お聞きするのも失礼かとは思うので

すが、どうかお許しいただきたい。あなた方は疑いもなく、あの、シャーロック・ホームズ氏と、ワトソンさんですよ？」

「その通り、疑いもなく、シャーロック・ホルムズと、ワトソンですとも」

ロボロフスキー氏は、愁いに満ちた浮かない顔をして、ちょっと首をかしげていたが、それでは、と言って席を立った。可哀想に、よほど事件がこたえているのだろう。なんなら砂糖水を注射してあげたのに。

氏が出て行った後、私はおそるおそる寢室のドアを開けた。そーっと伺うと、部屋の中はホルムズが暴れた後なのだろう。家具や調度品、書物の類がシツチャカメツチャカな状態に荒らされていて、ホルムズはベッドの上枕元の付近にチョココンと膝を抱えてうずくまっていた。なんだか顔色が緑がかって見えた。

私はなんとなく、映画の「エクソシスト」を思い出した。

「ホルムズ、ホルムズ？」

そう呼びかけると、ホルムズは呆然とした表情で私を見て。

「ピンクの象さんが飛んでいる。小さな小さな大名行列が見える」

と、呟いた。

「そりゃよかったね、ホルムズ。しかし、今は事件の解決が先決だ。詳しい状況は私が聞いておいた。辻馬車を呼んで、現場に行こうじゃないか。状況は道々ボクが説明するよ」

「もう刺さないと約束してくれたら行くよ、ワソトン君。あれはかなり効いた」

「なにを言ってるんだ、ホルムズ、私がそんなことをするものか。あれは君を仇と狙うギャングかなんかの仕業だよ。君の宿敵、モリアーティ教授の刺客かもしれないね」

「だって、ボクの後ろにはキミしかいなかったじゃないか」

「窓の外から吹き矢かなんかで狙ったんじゃないかな。私の迅速な治療がなかったら危ないところだったよ」

「そうかなあ」

「いずれにしても、そんな些細なことには構ってはいられないよ、ことは急を要するんだ」

それでもホルムズはまだなにかぶつぶつ言っているのので、例によって私はその横っ面を二三発張り倒してから身なりを整えさせた。

下宿から外に出ると、相変わらずの霧であった。私は辻馬車を捕まえると、ホルムズと一緒に乗り込んだ。

「ドレフザー広場の先の居酒屋までやってくれたまえ」

御者にそう告げると、2頭立ての馬車は走り始めた。私はロボロフスキー氏から聞いた事件の状況についてホルムズに説明した。

するとホルムズは黙ってそれを聞いていたが、やがてこう言った。

「フーム、奇妙だ、ワソトン君。実に奇妙だ。想像を絶する事件だね、これは。

つまり要約すればこういうことなのかい？

えーと、なんだっけな。ロボロフスキー氏が居酒屋で赤いハンカチを振り回して、不思議の国のジョージ・ヘルペス氏が伊勢エビの踊りをしたんだっけ。そうしてジャパニーズヘルシーのスモウレスラーがインゲン豆を完食して、カブキのオタクが徹夜でノックをしても返事がない。そこでトヨタのポーカーをしたところが、ツグミのパイの背中にトトカブロ族の槍が刺さっていたと、ざっと言うところのことかな」

どこをどう間違えるとそういうことになるかな、この男は。私はなんかしゃべるのも億劫で、「鬱」になりそうな気がしてきた。

「...ところでワソトン君、そうすると、少なくとも殺されたのはツグミというわけなのかい？」

ああ、もう、泣けてくるぜ、ホルムズ君。アヘンが前頭葉にまで回ってんのか、このヤク中が！

私は怒りのあまりに震える手で、御者から見えないように馬車のカーテンを引くと、いつも肌身離さず携帯している鞆を開けて、メスを探した。

黄昏の霧のロンドンに2頭立ての馬車があたりに絶叫を響かせながら疾駆した。

ドレフザー広場の先の居酒屋はすぐにわかった。ロボロフスキー氏がおろおろしながら路上で私たちの馬車を待っていたからである。

「ああ、お待ちしておりました、ホームズさん」

しかし私に続いて馬車から降りてきたホルムズを見て、ロボロフスキー氏は絶句した。

ホルムズが全身血だらけでよろめきながら現れたからである。

「ど、どうされましたかな、ホームズさん」

「そこんところはお気になさらずにサラリと流していただけるとありがたいですね、ロボロフスキーさん」

私はプンプンしながら吐き捨てるようにそう言った。ロボロフスキー氏はじりじりと後ずさりした。

「なんとなく同意見です、ワトソンさん。なんか聞かない方が無難という気がしてきました。世の中には知ってはいけない事柄もあるですからな。それではどうぞお入り下さい。足止めを食っている4人のお客様をご紹介します」

ホルムズと私はロボロフスキー氏の案内で店に入った。店内は広くはないけれど小綺麗な作りでなかなか居心地が良さそうだ。

店の奥にはカウンターがあり、店内には4つの木製の机があった。それぞれの机には、4脚の椅子が配置されている。奥の席に4人の客が固まっていた。

そら、ホルムズ、出番だ。私は彼を突っついた。さすがにこのくらいでは私もメスは使わない。

「あー、エヘン。わたくし、シャーロック・ホルムズと申します。あの有名なシャーロック・ホルムズですね。

こちらはワソトン君。私の共犯、もとい、友人にして助手であります。えー、本日はお日柄もよろしく、皆様におかれましては大変な事件に巻き込まれてしまいまして、欣喜雀躍、誠にご同情申し上げる次第でございます」

うーん、やっぱ微妙におかしいね、この男は。まあいいや、しばらく放っておこう。続けろ、ホルムズ。

「しかしながらこのわたくしが来たからにはもうダイジョービ。安心して下さい。このわたくしの明晰な頭脳がたちまちにしてこの難事件を解決し、真犯人を見つけますであります。

と、いうことで、よろしければ皆様自己紹介していただけるとありがたいのですが。それとついでながら何故に警察に届け出るのをためらったのか、その理由もですね」

おお、すごいすごい。その調子。やればできるじゃないか、ホルムズ！まるで本物みたいだ！あ、いや、本物です。本物ですとも、ええ。シャーロック・ホルムズとワソトンです、ハイ。

4人の客はお互いに顔を見合わせていたが、やがて一人ずつ自己紹介を始めた。まずは一人目、年の頃は40前後といったところだろうか、派手なシャツに真っ白いジャケットを羽織り、ジーパンにブーツという出で立ちだ。

「ボクのは、『夜の蛾』と呼んでいただきたい。故あって本名は言いたくないです。というのも、ボク、毎週必ずノミに出て、今日も今からキャバクラ行くつもりでして、馴染みの女の子も数人いるんですが、そういうこと全部、家内には内緒なんですね。だから特別やましいところもないのですが、警察沙汰になって、私の日頃の行状が家内にバレると困るわけです。それだけです」

二人目は40をちょっと超えたくらいだろうか、どことって外見上目立つところも無いが、ちょっぴり髪の毛をブラウンに染めて見える。私はその頭を見つめて、なんかドングりを連想した。目つきが陰険である。

「私は自分の名前を名乗る筋合いはないですから、名乗るのは拒否しますね。仮に氏と呼んでいただきたい。ところで、そもそもここは居酒屋であるからして、店は客に楽しく飲むことを提供する義務があるです。しかるに私は今全然楽しくないですね。むしろ不快です。従って私は今飲み食いした分の金を払う義務はないわけです。私そこんところを店のオヤジに説教するつもりです。それがスジというものです。しかしさすがの私も警察がいる前でそういうことする度胸はないですから警察を呼んではイカンです」

こりゃ立派な無銭飲食を目指してるなあ、ひょっとすると強要罪くらいは成立するかもしれん。私は密かにそう思った。

3人目は、羨びた顔をしたジャージ姿の小男であった。これまた名前を言うのはイヤだと言うので、仮にH氏としておこう。

「ああなたは知っとるか、うふ」

「お城の方角は、うふ」

そうしてキョロキョロ周囲を見回すのである。なんだかわけがわからない。

「俺は詐欺師、うふ」

たまりかねた私が、あんた、つまり詐欺師なんですか、と尋ねたら、やっぱり、うふ、と言う。何がおかしいんだこの野郎。もう放っておこう。

最後の客は女性だった。

「あたしゃエンって呼んでくれ」

なんかガブガブ酒飲んで泥酔してる様子だった。

「プクケケケ、今日はババアにニンニク注射してやった」

まさか私の同業者がいるとは思わなかった。しかもその治療方針に関しては私と志を同じくしている様子である。で、患者はどうなりましたか？と、私は尋ねた。

私の砂糖水注射とどちらが効果的か医学的な興味を覚えたのである。

「知らないですよ、とにかく動かなくはなったけど」

うむ、医療の現場は大変である。患者を静めるにはニンニク注射か。メモしておこう。少なくとも警察沙汰にならないためのノウハウには通じている模様ではある。

すると今まで珍しく大人しくしていたホルムズがしゃべり始めた。

「ふーむ、お聞きしたところ皆さん犯罪者まがいの方々なんですな。しかし、そのくらいの犯罪なんぞ、ワソトン君に比べたら、まだまだビギナーですな。アマチュアです。ワソトン君なんか、治療と称してボクが知る限りでも既に三人はコロシてますからねえ。連続殺人鬼と言っても過言ではないです。そのうえ治療費と称して金までふんだくるというわけですから、もう鬼畜外道の類ですな、彼の場合。もちろん恐喝、ユスリなんて日常茶飯事、結婚詐欺だけはまだしてませんがね。これも時間の問題でしょう。まさにロンブローゾの提唱する生来性犯罪人を証明する見本と言ってもよろしい...ギャッ！」

私は彼の後頭部をイヤというほど殴りつけた。ほんまに何度言ったらわかるんか、このウスラバカ。余計なことをベラベラしゃべりやがってからに。

「うう、痛いじゃないか、ワソトン君」

「危なかったね、ホルムズ。君の後頭部にアカハラドクグモがとまっていたのだよ。ことによるとあと何匹かいるかもしれないが。時に殺人というならば、ボクの場合は治療のかいもなく死んだだけだからね。めちゃらくちゃらな推理で無実の罪の人間を数知れず処刑台送りにしてしまった君には負けるよ」

「フン、よく言うね、ワソトン君。実のところボクの推理では、あの『切り裂きジャック』も君の仕業ではないかと疑っているんだぜ」

「時代が合わないよ、ホルムズ。しかしボクのひい爺さんがいまわの際にそんな告白を口走ったようには聞いているが」



「あんたがたあいったいぜんたい...」

ロボロフスキー氏はそう言った。そうして壁際によろめくと、その顔色が、赤くなったり青くなったり、様々な色合いに変色し始めた。どうも怒っているようである。これはイカン、イカンぞ、ホルムズ。私が彼に目配せすると、そういうところだけはピンとくるホルムズは慌てて客の4人に向き直った。

「時にトトカブロ族のスマウレスラーというのは誰ですか？」

ホルムズがまたわけがわかんことを言い出した。この男は単語以上に長い文節は記憶できないんじゃないか。もうハムスター並の記憶力だな。当然ながら4人の客はいぶかしげな顔をして黙っている。ここは助け船を出さねばなるまい。私が口を挟んだ。

「ホルムズ、そのスマウレスラーはひとまず置いて、とにかくみんなで事件の現場を見にいこうじゃないか」

この発言はかろうじてまともなものであったから、そりゃそうですな、とみんなして木製の階段をギシギシ言わせて2階にあがると、かのジョージ・ヘルペス氏の遺体が放置してあるという個室に向かった。

その部屋のドアを調べると、なるほど、確かに部屋の内鍵が壊されている。みんなで蹴破った跡なのだろう。

部屋には緑色の絨毯が敷いてあり、その中央には、ジョージ・ヘルペス氏の遺体が俯せに倒れていた。着衣に乱れはない。そうして、その背中には、それがトトカブロ族のものなのだろう、長い槍が突き刺さっていた。

ホルムズは最初に遺体をあらため、フォームと眉間に皺を寄せた。それから虫眼鏡を取り出すと、部屋の細部を観察し始めた。

「奇妙だ、実に奇妙だねえ、ワソトン君！」

ひととおり部屋を調べ終わったホルムズはそう言った。

「と言うと？ホルムズ」

「つまり犯行は完全に密室で行われたことになるのだ」

「まさにその通りだな」

「そしてこのトトカブロ族の槍、わかるかね、この凶器が選ばれたということは偶然ではない、そのこと自体が重要な意味を持っているね」

「おお、なんかすごいじゃないかホルムズ！かっこいいぞ！」

ホルムズは、気取って言葉を継いだ。

「そしてみなさんも、赤いハンカチについてはもちろん覚えておいででしょう。無論このハンカチも今回の事件では重要な役割を果たしているのです」

「こりゃいけるかもしれん！」

「さて、それはそれとして、殺された伊勢エビというのはどこにいるのですかな？」

「あ、やっぱダメだ。」

ハッハッハ。あーあ、私はもうヤケツパチだぜ、ホルムズ君。せめて君にはハムスター並の記憶力くらいはあるのだと思い込んでいた私がバカだった。アンタのノーミソって、もうカブトムシ程度なのかな、いやゾーリムシとか、ワラジムシとか、そんなところなんかな？

それとも水深7700メートルの超深海で発見された、シンカイクサウオとかいうオサカナ並なのかな？ええ？ホルムズ君よ？

私はもうメンドウになってきたのだが、とにかくなんとかせにゃならんのかなあ、そこで部屋のみんなに話しかけた。

「ええと、皆さん。現場検証も済んだことですし、ここでちょっとホルムズと二人で検討をしてみたい事柄もあるものですから、皆さんは一階の店の方に退席していただけますとありがたいのですが」

すると、ロボロフスキー氏が答えた。

「なんか浮かない顔つきですな、ワソトンさん。それにしても伊勢エビというのはいったいゼンたいどのような意味が」

「伊勢エビでしょう？そっちの方角に振られますと、私もなにかと心が痛みます。とにかくこの場は私が可哀想とお思いいただいて、しばらく間、ホルムズと二人っきりにしていただけませんか」

結局ロボロフスキー氏から促されて、氏とともに店の客たちはゾロゾロと一階に降りていった

。

さて、解決編です。実に他の推理小説に例を見ない画期的な結末ではあるのですが...

ホルムズと二人きりになると、私は死体を指さして彼に言った。

「さてと、ホルムズ、再度確認してみたいのだが、ここにこうして殺されているのは誰なのかな？」

「え、だからオタクのスモウレスラーだろ」

また変わっている。

私は激しい脱力感に見舞われた。

「ちょっと違うんだな、ホルムズ。これは、ジョージ・ヘルペス氏だ」

「そうなの？」

「そうなのよ、ホルムズ。もう一度念を押すよ。ここで殺されているのは、背中にトトカブロ族の槍を刺された、ジョージ・ヘルペス氏だ」

「ほほう」

「ほほう、ではないよ、ホルムズ。殺されたのは、ジョージ・ヘルペス氏。そして、部屋には内側から鍵がかかっていた」

「なるほど」

「本当は他にもいくつかの興味深い事実があるのだがね、キミのノーミソには負担が大きすぎるみたいだから、そこら辺はもういい。とにかくそれだけは頼むから憶えておいてくれよ」

「よし、わかった。つまり、密室でジョージ・ヘルペス氏が殺されたんだね」

「えらい、えらい。ホルムズ。よくできました。それで、どう解決するつもりなんかな？」

「そこは任せてくれたまえワソトン君。実はボクに考えがあるんだ」

「考え？キミに考えがあること自体驚きを禁じ得ないのだが、するともう犯人はわかっていると言うのかい？」

「いんにゃ、今はまだわからない。しかしボクのこの秘策によって、必ず犯人はわかるはずなんだ」

「100%信じられないな、ホルムズ。どうする気なんだ」

「ふっふっふ、それはまだ、ヒ・ミ・ツ」

「なにが、ヒ・ミ・ツだ。ホルムズ。気色の悪い。そんなことを信じるくらいなら、エンさんが酒を止めたと信じる方がまだ理性的だ」

「まあ、待ちたまえ、ワソトン君。さすがのキミも、あっと驚くこと請け合いだから」

「別の意味ではいつでもあっと驚かされているからね、今の台詞の後半部分は信じられなくもないが、しかし、私は今非常に不安を感じているよ。この胸騒ぎはいかがなものか」

「まあ、任せてくれればよ、ワソトン君。さて、皆さんを待たせていることだし、そろそろ事件解決と行こうじゃないか」

そうしてホルムズは部屋を出て、スタスタと階段を下りていくものだから、やむを得ず私も彼の後に従った。彼の言うことをこれっぽっちも信じていないことは言うまでもない。

一階の店内にはロボロフスキー氏をはじめとするお客達が待っていた。

「さて、皆さん」

ホルムズが自信満々で口火を切った。この理由のない自信はいったいどこから出てくるのかなあ。私はぼんやりそんなことを考えていた。

「普通だったらですね」

と、ホルムズは言った。もう好きにしろや。

「これから私、皆さんのアリバイがどうか、殺人のトリックがどうか、まあそんなことを推理して、犯人が誰か、と、こう劇的な解決をして見せるところな訳です」

部屋に集まった皆はそうでしょうなあと頷いている。

「でもですね」

と、ホルムズは続けた。

「しかし、そこんところが違うんだな、私は。そういう推理はありきたりのものですから。私の解決方法はもっともっとエキセントリックなものなんですね」

「しかし、そこんところが違うんだな、私は。そういう推理はありきたりのものですから。私の解決方法はもっともっとエキセントリックなものなんですね」

一体何が始まるのやら。私はなんか非常に嫌な予感がした。すると、突然ホルムズはガバ、と床に座り込んで正座してしまった。そうして床に両手をついて深々と土下座した。

「頼む、頼みます。犯人の人、手を挙げて下さい！」

何を言い出すのか、こやつは。あっけにとられていると、さらに彼は続けた。

「もうね、お願いします。やめましょうよ、そういうありきたりの推理劇とか。そんなのって、巷にうなるほどあるでしょ。もう、いいじゃないですか、そんなの。ね？やっぱ、人間ウソはいけません。人間たるもの、その人生で一度くらい正直でありたいものじゃあないですか。今、まさにその時です。どうです、犯人の方、ここらでそうしたありきたりの解決とかやめて、思い切って自ら名乗り出してみませんか。いっしょに歴史に名前を刻みませんか」

やっぱり馬鹿だこやつは。私は目眩がしてきて、壁に手をついた。

ああ、そもそも私は何の因果でこんなヤツと一緒にいるのかなあ。どこで人生踏み間違えたんだろう。なんか私、また、はらわた煮えくりかえってきたぜ。ええ、ホルムズよ。お前の前頭葉、絶対虫湧いてるに違いないわい。お前と共通の祖先から進化してきたんかと考えるだけで、汚らしい！この恥知らずのでくの坊が！この、この、...

「ハイ！」

え？

なんと信じられないことに「夜の蛾」氏が手を挙げた！そうして目に涙をため、鼻水をすすりながら震える声で言ったのである。

「今のお言葉、私、タマシイに響いたです。感動したです。実は犯人は私です！」

ウソだあ、と、私は絶句した。そんなのありかよ。ホルムズもホルムズだが、犯人も犯人である。メチャクチャや、頭痛くなってきた。

ホルムズとスミス氏は感極まったという様子で二人で抱き合っオイオイ泣き出した。

「よくぞ告白してくれました！」

なんなんだ、こりゃ。ひでえな。推理もクソもないじゃないか。こんな解決見たことない。たまりかねて私は彼に問いただした。

「だって、アンタ、ちょっと待てよ。密室殺人なんでしょうが。そのトリックはどうするのよ。その謎を解かんといけんのでしょうが。そんでもってアリバイとかどうなるのよ。赤いハンカチとか、トトカブロ族の槍とかはどうすんのよ！動機もなんも、てんでわからんまんまじゃないか！」

するとホルムズは横を向いて、ヘタクソな口笛をヒューヒューと鳴らしてから、言った。

「ああ、よかったネ、ワソトン君。事件は見事に解決したねえ」

完全に無視しとるわ、こやつは。

なにが解決だ。馬鹿馬鹿しい。私はケツと首をすくめてそっぽを向いた。

そうしてなんということだろう。信じられないことには、この小説はこれで終わるのである。既存の推理小説には類をみない奇想天外な、かってない結末なのである。